

日本の解剖學用語について

第一解剖学教室 教授 尾 持 昌 次

解剖学に学名即ち解剖学用語がつきものであることは衆知の事実である。それ程に解剖学とは切つても切れぬ関係にある解剖学用語の変遷の有様を眺めて見ると些か興味あることではないかと考えて筆を執つたのであるが、考えて見ると解剖学的名称の源はとても古いようで、言語学の素養のない私には正確なことを述べる自信はない。何となれば人間が言葉を持つ様になつて先ず発したであろう言葉の一つに恐らく自分自身又は他人の身体の一部に関するものがあると想像されるからである。がこゝではそのような言語学的の難しいことは省いて所謂腑分をして内臓その他についての知識を得てからの後の名称についてのみ考えて見ることとする。

歐洲に於ける近世解剖学を確立した人は Andreas Vesalius であることは余りに有名であるが、彼が生れたのは西暦1514年である。しかし西暦紀元前400年頃の太古に Hippocrates よつて主に骨が研究されてこれに関する若干の名称が与えられたことが知られている。そして紀元前320年頃即ちエジプトのアレキサンドリアの医学が繁栄した頃には人体の解剖が行われて中枢神経や末梢神経について研究され中枢神経に精神が宿ることが知られている。又既にこの頃に動脈と静脈の区別もわかつていたが、動脈は血液を容れるものではなくて、精気を含むものであるとされていた。このことは今日に於ても広く用いられている arteria, Arterie, artery (動脈)なる言葉が aer (空気)と密接な関係にあることでも察知することができる。このような中枢神経、末梢神経乃至は脈管についてもいくらかの名称が新たに与えられたことはもちろんである。翻つて我国について調べて見ると歐洲よりも900年位も遅れて西暦459年即ち雄略天皇の3年の夏に罪ありとされた婦人の屍の腹を割いたとの記録が日本書紀にあるが、素より科学的に調べられたものではないから内臓について何かの名称が与えられたかどうかはわからない。支那では相当に古く既に西暦16年に解剖の行われた記録がある。何としても古くから注目されたのは内臓であつて五臓六腑と称して五臓即ち主要な内臓として心、肝、脾、肺、腎と六腑即ち主要内臓の補助として胃、大腸、小腸、膽、膀胱、三焦が挙げられている。興味あることにはこれらの五臓は各々宇宙の元素即ち木火土金水に相当するものと考えられ、例えば心臓は火に、肺臓は金に、腎臓は水に、肝臓は木に、脾臓は土に相当すると考えられている。その他これらの五臓は四季即ち春夏秋冬に、色即ち赤白

黒青黄に、又味即ち苦辛鹹酸甘に対応して考えられている。内臓以外に骨にも種々の名称が挙げられているが、今日そのまゝの名称が残っているものは少い。僅に椎節(即ち今日の椎骨)にこれを認め得るが、これとても21個から成るとされていて知見としては不完全なものである。これらの名称はその後我国にも仏教の渡来と共に伝わつたらしく、円融天皇の永観2年の秋(西暦982年)に丹波矢田郡の人丹波康頼の著になる我邦最古の医書たる醫心方の中にもこれらの名称が散見されるといわれている。丹波康頼の祖先は漢人であつて応仁天皇の時に帰化したのである。又上述の六腑の中の膽は胆嚢を指すものと考えられているが、三焦は何を指すかは明かではない。未だ三焦を図説したものをも見ないので假空の臓器でないかとも思われているが、又一説によればその一部は今日の膀胱を指すのではないかと云われている。降つて花開天皇の正和4年(西暦1315年)に梶原性全が萬安方62巻を著わした。この書物には醫心方とは異つて「五臓六腑形候」と題して内臓の構造及び機能に関してやゝ纏つた記載を含んでいて内臓の図若干が掲載されている。第1図はそ



第1図 梶原性全著の萬安方に所載の人体解剖図

の一つであるが、これらの図はしかし我邦に於けるオリジナルのものではなく、支那古代の「欧希範五臟図」を写したものと推察されている。欧希範と云うのは人名であるが、この五臟図は欧希範個人を解剖した所見であるか、その一党56名の解剖所見の綜合図であるかは明かではない。この図を見ると五臟六腑の他に結喉（現在の喉頭と気管）賁門、幽門、隔膜（今の横隔膜）等今日の解剖学でも使われている名称が見られて興味深い。但し萬安方中の解剖学的所見の記述そのものは醫心方に於けるものと大差はないと云う。いずれにしても今から650年乃至1000年も以前に、即ちみやびやかな平安朝時代や武家政治の鎌倉時代に我々の祖先がこのような今日我々が用いているような胃とか膀胱とか大小腸と云つた術語を既に使用していたかと思うと感慨無量である。内臓の名前はこのように現今のものと同じものが多く、その知見が幼稚であつたことは図でも明かな通り肺が左右に分れていなくつたり、脾と肝膽との位置が反対であつたりすることでもわかる。

その後我国では解剖学上の目新しい記録はなくて江戸時代に至つている。江戸時代の中期即ち宝暦4年（西暦1754年）に山脇東洋は京都で人体解剖を行つてその所見を蔵志と題して公表しているが、この蔵志の図を見ると旧来の所謂五臟六腑の他に尿道、食道、氣道、尿道（今日の直腸）、精道（今日の射精管乃至は精

管）、脊骨、肋骨、直骨（今日の胸骨）等の名称が読まれる。その後15年程の間に所々で解剖が行われたが、何としても日本の解剖学界に大きい進歩を齎したのは明和8年（西暦1771年）に杉田玄白等によつて行われた江戸千住小塚原の腑分であろう。と云うのはこの腑分によつてオランダ医学の進歩を知つた玄白が同志六名と共にオランダ解剖書ターヘル・アナトミア（ドイツ人クルムス原著の蘭訳本）の翻譯を思い立ち、3年間の言語に絶する努力の結果原稿を書き改めること11回にして安永3年（西暦1774年）に至つて有名な解体新書を公刊したからである。この事のある迄は日本の解剖学は専ら支那のそれに拠るか又は自らの經驗を基としていたのであるが、玄白の解体新書に於て始めて当時既に非常に進歩していた西欧の解剖学が我国に紹介されたからである。この事は同時に我国ではまだ使用されていなくつた甚だ多くの解剖学用語が生れたことを意味する。この解剖学用語を新たにつくるについては一方ならぬ苦心が払われたことは察するに余りあるのであつて、その苦心談の一部は蘭学事始にも載せられているが「恰も異邦に漂泊して東西を辨ぜず、暗夜を独行するが如き」ものであつたらしい。解体新書はこのように当時としては劃期的の著作ではあつたが、当時は参考書も少く従つて翻譯上の疑点を氷解する迄には至つていなくつたので杉田玄白はその愛弟子大槻玄潭に命じて解体新書の改訂をさせたが、玄潭は



第2図 宇田川榛斎著の醫範提綱の題言の一部



第3図 醫範提綱内象針版図の説明文の一部

解体新書の原書となつた和蘭訳のクルムスの解剖書と照合したり又自ら解屍をしたりして寛政10年(西暦1798年)に重訂解体新書14巻を完成した。この解体新書及び重訂解体新書に於て新しく造られた解剖学用語は余にも数多いので、そのすべてを挙げることはできないがその中でも特に興味のあるものを摘録して見よう。解体新書或は重訂解体新書に於て新たに制定せられ現在もそのまゝの名称が残つている典型的なものでは動脈、肺動脈、瓣、口蓋、軟骨、虹彩、神経、横隔膜、回腸、膽汁等があるが、現在では最早用いられなくなつた名称でも原語の直訳又は発音をもじつて附けたと思われる興味深いものがある。これらの例をドイツ語と対応して掲げて見ると指環軟骨(Ringknorpel)、血脈(Blutader)、薄腸(Dünndarm)、厚腸(Dickdarm)白建(Nierenbecken) ^{バンド} 藍度(Band)等がある。又この当時には pancreas に関する知識が殆どなかつたので、これに対する訳語には随分苦勞したらしく、解体新書ではこれを大機里爾と名付けている。尚キリイルとはオランダ語 klier の音訳で今日の腺を意味するものといわれる。pancreas は重訂解体新書に於て肺と改められているが、後述する如く更に後になつて腺となり今日に至つている。

解剖学用語について次で起つた大変革は文化2年(西暦1805年)に刊行された宇田川榛齋の醫範提綱乃至はその原本である遠西醫範によるものである。この書物では嘗て解体新書乃至は重訂解体新書で名付けられた用語が多数改められ、その多くは今日もそのまゝ用いられている。これらの例としては視神経、甲状軟骨、披裂軟骨、心嚢、鎖骨下動静脈、胃液、空腸、結腸、腸間膜、乳糜、乳糜管、腎盂、腎動静脈、腹膜、摂護、脂肪、靱帯、骨髄、網膜、睫等枚挙に遑がない。又この時に新たに文字そのものも造られたが、その代表的なものとして腺、腔を挙げる事ができる。これらの新製字はいずれも肉とその字義をあらわす文字との組合せからなつていてその苦心の程が察せられる。こゝに於て大体に於て今日用いられている解剖学用語の基礎ができたものと考えてよい。第2図は宇田川榛齋の著になる醫範提綱3巻の中の第1巻の題言の一部で円印の下に書かれた大きな文字は醫範提綱で始めて用いられた用語で、その直下の小さい文字はこれに相当する解体新書に於ける用語を示している。こゝでは上述の腺が新たに造られたことも示されている。第3図は同じく醫範提綱に付属した内象銅版図の説明文の一部である。この解剖図はこれ迄解体新書又は重訂解体新書の附図が木版であつたのに対し、始めて銅版を用いた精巧なもので、その点でも歴史的意義の深いものである。この説明文もまた銅版刷であるが、これを見ると甲状軟骨、披裂軟骨、喉頭、気管等

馴染深い用語が散見される。尚この銅版図の鑿刻者は有名な重歌堂田善であつた。その後蘭学が行われるにつれ、又解剖が数多く行われるに従つて多少の用語の追加はあつたものと思われるがとり立てた程の事もなく明治時代に至つた。

明治15年(西暦1882年)には東京大学の教授であつた田口和美が人体解剖綱要を著してその後の新知見による新しい術語を用いているが、杉田玄白によつて、漸く系統立てられ、その後の諸家によつて改訂又は追加せられた解剖学用語に更に大飛躍を与え、又従来学者によつて区々であつた用語の統一を成し遂げたのが鈴木文太郎博士である。その動機は時あたかも明治28年(西暦1895年)にドイツ解剖学会がスイスのバーゼルに於ける会合で決めた解剖学ラテン名(BNA)が発表されたのに対し、我邦ではこれに対応する用語がなかつたからであつて、鈴木博士は我邦古来からの用語や新しくは田口氏の用語を参照しながら考訂を加え、新しいものには自ら訳語を造つて解剖学名彙として上梓されたのである。時に明治38年(西暦1905年)である。この解剖学用語は語の数も現在用いられているものに近い位に多く且広く世に行われたから、現今でも相当年輩の医家はよく御存知のことであろうと思う。鈴木博士のこの解剖学用語は誠に結構なものではあつたが、同博士の漢学の素養の深さの然らしむる所か相当に難解の文字も含まれていて、その後の医学生にはとりつき難い感がないでもなかつた。それで昭和7年(1932年)に日本解剖学会の總會で決められた新しい日本名が生れた。但しこれは鈴木博士の難解な文字を改めた程度の比較的小規模の改訂ではあつたが、こゝに於て日本の解剖学用語の平易化の第一歩が踏み出されたのである。今鈴木博士の原著とこの改訂名との間の著明な変化のあるものゝ中で基礎的なものについて少々記して見ると、顛顛骨(側頭骨)、顛頂骨(頭頂骨)、上齶骨(上顎骨)、下齶骨(下顎骨)、頭顛(頭蓋)、顴嘴(尺骨頭)、耳殼(耳介)、耳喇叭(耳管)、識官器(感覚器)、静脈竇(静脈洞)、上齶竇(上顎洞)基礎動脈(脳底動脈)、子宮喇叭(輸卵管)、髌臼關節(股關節)、截痕(切痕)等がある。但し括弧内は改訂名である。

しかしこの改訂名もまた大変革を受ける時が来た。それは鈴木博士の原著乃至はその改訂名の基幹となつていた上記のBNAが1935年に至つて大改訂を受けたからである。この新しいラテン名はJNA又はINAと呼ばれているが、その改訂の程度は高度であつて例えばBNAに於けるA. anonymaがTruncus brachiocephalicusになつたとかCellulae ethmoidalesがSinus ethmoideiになつたと云つた大きな変革も少くなかつた。JNAについては行き過ぎであるとの意見もあつた

が、1895年から1935年に至る40年間に於ける解剖学の進歩に応じた用語の改良も少くなかつたのである。日本の解剖学用語は必ずしもラテン学名と同じものでなくてもよいのはもちろんであるが、このように基本となつたラテン名が變つたのでは従来のまゝでは不便でもあり且又この頃に學術用語平易化の考えは世に広く行き渡つていたので日本の解剖学用語もこの際再び改訂することに議が決つた。それで委員によつて審議されて昭和16年末(西暦1941年)に改訂草案が完成、これは日本解剖学会の評議員に提示してその賛同を得る一方、日本医学会の用語整理委員会にも連絡し審議せられて単に解剖学界だけの用語でなく日本の医学界全体の用語として選定せられたのは昭和18年(1943年)であつた。この様に解剖学用語が日本の医学界全体の用語として承認されたのも劃期的のことであつて、従来同じ物が或は眼科学、或は外科学に於て異つた風と呼ばれてきた不便がここに除かれたのである。かくてこの新しい日本の解剖学用語は世に用いられることゝなつたのではあるが、時宛も大戦争の末期に當つていた為に医学書の出版が極度に困難であり、少数ながら出版された医書も大部分は旧い版の紙型を用いていたような事情もあつて、このことは新しい用語の普及にも非常な障碍となつたのは誠に残念であつた。しかし終戦後出版事情の改善につれて新しく刊行せられる医学書には漸次この新しい名称が採用せられ、殊に解剖学関係の書籍には全面的にこれが用いられて今日に至つている。この新しい日本解剖学用語と昭和7年の用語との相違についてその概略を述べると、新しい用語は原則としてJNAに拠つているのでBNAに準拠していた昭和7年の用語と較べて相当な変革があるのは当然であるが、それに加えるに新しい用語では文字の平易化を更に推進したのでラテン名がBNAとJNAと等しいものでも日本名では変更されている例も少なくはなく、尙更に日本名間の変革が甚しくなつている。例えば無名動脈が腕頭動脈になつたとか肋骨蜂窠が肋骨洞になつたのは上述の例に示したようにラテン名が変更されたのであるから当然であるが、骰子骨が立方骨に、顴骨が頰骨に、頤門が泉門に變つたように基本となつたラテン名には変更がないのに日本名が易しくなつた例も相当に多い。同様の例を更に挙げると跗骨が足根骨に、眼骨が眶骨に、蹠が足底に又肝臓体が脳梁に或は穹窿が円蓋に變つている。このような例でもわかるように、難しい漢字が相当に思い切つて抹殺されてしまつたのである。即ち上述の昭和7年に決められた解剖学用語には約600余種の漢字が用いられていたのであるが、この新しい日本名では力、土、巴、尻、比、古、匠、孖、夾、奇、怪、寫、阜、埤、廻、擲、貳、挺、胛、背、蛛、魚、脣、脇、梢、毳、痔、趾、喙、垂、淋、肝、附、

膊、盞、窠、跟、珙、厭、窪、縮、綵、膊、膈、骰、髻、珊、締、膈、銹、閭、楸、腕、鞞、闕、髀、樞、臂、薦、蹠、脾、蹠、龜、髀、頤、抵、謹、颯、鬚、鬚、鬚、顛、顛、顛などの概ね読み難いか又は誤読の虞のある文字又は意味の不明瞭な文字73字が全削除されて了つた。そしてその代りに新しい文字として工、厝、啄、杯、踵、采、立、青、茸、限、格、仙、寬、泉、核、など比較的易しいもの15字が加つているに過ぎない、故に新しい解剖学用語に使用されている漢字はその数に於て約10%を減じているのみならず質に於ても非常に易しくなつていたのである。

最後に決つてから10年以上を経たこの新しい日本名は今後どのようになるであろうか。私としてはごく近い将来には變ることあるまいが、今後5年乃至は10年の後には小規模ではあつても改訂は必至と考へている。その根拠とする所はラテン名が再び改訂されると予想されるからである。ラテン名の改訂の時期は早ければ来年にも実現するかも知れない情勢にあるから、その後数年にして日本名も變る可能性がある。がしかし私は現在の日本の解剖学用語の改訂に自分自身が関係したせいかも知れないが、現在の用語はそんなに悪くはないと思つているし、又度々用語を變えることはその普及上にも百害があるから次回の改訂はできるだけ小規模でありたいと思つている。

参 考 文 献

- 宇田川榛齋著 醫範提綱 全上 醫範提綱内象銅版図 富士川游著 日本医学史綱要 昭8
 鈴木文太郎著 解剖学名彙 昭2 全上 全改訂族 昭19 緒方富雄訳 蘭学事始 昭19 高木耕三・尾持昌次共著 解剖学名集覽 昭29 尾持昌次著 解剖学名辭書 昭25 Paul de Terra著 Vademecum anatomicum, 1913 Triepel-Stieve著 Die anatomischen Namen, 1940 Stieve著 Nomina anatomica, 1938